

学習の点検と評価の教育的意義

矢口 新

1

教育の評価ということばが普及しはじめたのは終戦後間もない頃であったことをおぼえているが、その頃評価の正しい概念については、ずいぶん聞かされたものである。しかしそれらのことも今は夢であつて、評価の正しい概念はいつの間にか姿を消して、評価とは生徒に成績をつけることだというような通俗的見解が当然のことのように横行している。とくに最近数年は学カテストが多くの人々の注目をあびて、それがそのまま学習の点検であり、評価活動をやっていることだというように考えられている。こういう錯覚が改まるにはなかなか時間がかかりそうである。それはこの錯覚の根が深い所にあるからである。根が深いということは、教育の考え方全体に関係をもっているということである。それだからこそ、教育評価だけの概念をいくら説いても、それがなかなか普及しないのである。学習の点検・評価の教育的意義を明らかにするには、それについてわれわれがもっている考え方を反省することの方がさきの方である。

2

今日の学校教育においては学習の点検・評価は、表向きはどうあるかと、生徒の成績を評価するという意味で行なわれている。成績のよしあしは生徒のことなのである。よく勉強するのは成績がよく、勉強しなければ成績がわるいのである。あるいは、頭のよい子は成績がよく、頭のわるい生徒は成績がわるいのである。どこまでも生徒の問題である。よい成績をとりたければ一日五時間も七時間も勉強しろなどと先生はいうのである。つまり成績のよしあしについては責任は生徒にある。もつといえれば成績の評価は、生徒という人間の評価である。成績がわるいのは、生徒という人間がわるいのである。ひとりひとりの人間がよしあしの評価をされているのである。

評価の概念的な理解はどうであろうと、実際問題としてテストその他の学習の点検・評価が人間の評価に結びついていることは疑うことができない。学校の授業の区切りである学期末、学年末には成績通知票、通信簿がつくられる。教師の仕事はそれが終着である。生徒の側もそれが総決算の意味をもっている。親は成績がわるければ、勉強しなかつたからだとか非難するし、成績がよければ勉強したとほめる。あるいはお前は頭がわるいとかよいとかと批評する。点検・評価はこういう終着駅にむかつての体系の中に位置づいているのである。これは小学校から大学までかわらない。大学でも最後に成績証明が問題になつて、就職をする際には、この人間はよさそうだとか余りよくなさそうだとかと判断される。

結局、学習の評価・点検は人間の評価・点検に結びついているのであつて、教育という活動の評価ではないことは明らかである。

3

以上のような成績の評価が生徒の側に全然意味がないとはいえない。いな人間は自らの努力の結果を常に反省し批判し発展を期して次の努力をするべきものであるからその点では大いに意味があるといつてよいのである。生徒は自らの勉強の責任をとるべきである。汝自身を知れということがあるがまさにそれであろう。

しかし自己自身を知るということは、自己を競争馬の如き位置において、他人と着順を競争することではない。ところが、現在の成績評定はそういう傾向をもっていることはないか。小学校、中学校ではとくにその傾向が強い。いな高等学校の方がもっと強いといえるかも知れない。隣のなんとかさんは五がいくつだ、お前はいくつだ、まけないようにしつかりやれ、というのが親の感想である。高等学校や中学校では、何人中何番だというのが最大の関心事である。あいつは自分よりできるというのは、その競争馬の着順なのである。己自身を知るということは、こういう形でしか行なわれないものなのか。そういうことが自己自身の反省であり、批判なのだろうか。

生存競争ということばもあるから競争ということば人間にとって必要なものであるであろう。また単純にわかりやすいから、一着とか二着とかいうのがうけるのである。しかし多面的な人間の能力を単純化して競争馬の着順のように単純な順位に直すことが果たして意味のあることかどうか。生徒に与えられる成績通知票の如きものが生徒に己自身を知らしめるにどれだけ役に立つかということは検討を要するのではないか。

自分はどのような方向のことが、どのようにできて、どのようにできないのかということをも具体的に知ることが役に立つであろう。しか

もたえずそういう自覚を持たされることはよいことである。そういう事実をささるには他人と比較することも必要である。しかしそれは数であらわして、順位で表現し、競争馬の着順のようになったもので比較することではない。あくまで具体的な事柄において、己を知ることなのである。毎日の日常生活の中で行なうことなのである。

このように考えると、テストの結果を集めてこれを集計し、さらには様々なまるで異なった性格の教科のテストの結果を平均して順位を出すなどという原始的な成績評定をやっていることが、生徒の物の考え方を誤らしめている点は大いにあるであろう。それはまさに罪悪ではないか。生徒は己を知るといふ大切な人間的努力をすることを教えられずに競争馬をやらされているのである。己を見、他人を見ることは忘れる。いな誤った見方をする。こうして学校時代人間の誤った見方を育てられる。そうしてつくられた大人がまた人間を競争馬として見る。こうして人間の真実をみるのでできる人間が少なくなるのである。

競争馬、競争的成績評定は絶対に廃止すべきであろう。

4

生徒の側からいえば学習の評価とは、何ができて何ができないかを刻一刻自覚して行く過程でなくてはならぬ。刻一刻それを自覚し、一刻ができないものを克服する過程である。自らを自覚的に鍛練する過程なのである。プログラムテキストによって、一刻一刻に何かをやらされ、それに対する自己の反応力を自覚させられ、そうして自己をみがいて行く過程なのである。できないことは、人との競争に負けることではない。その前にある事柄に対して、自己が正しく反応し得ないことよってできないことをささるのである。そうしてそれに向かつてできるようになることである。競争に負けたことの自覚は、でき

るようになる契機とはならない。そういう精神状態は、不安定を招き、劣等感を起こすだけである。人にできるものが自分にできない筈はないと考えることの方が大切である。しかしそれができるようにするには、人と自分では順序や過程はちがうのである。速度もちがうであろう。それは人間のもつ個性というものである。そういうものを無視した比較は悪平等である。

現代の成績評定は、その点で極めて単純な思想、十八世紀的思想を土台にしている。人間は誰しも平等であるという初期の考え方に似ている。それ以前の差別の思想から抜け出すためには必要な思想であったが、単純に人間は平等であるのではない。みんなに同じ教育をさずければみんなおなじようになるなどといった単純なものではない。しかし現代の成績評定はそういうセンスを抜けていない。ひとりの教師が、みんなに同じように教育した、みんなできるようになった筈だ、あとは生徒の努力の仕方の問題だ、そこで、成績を評定してしりをたたく。よければほめて、わるければ罰する。こういった考え方である。

しかしこの考え方は人間を競争馬の如くにならざるだけである。人間はそんなに単純にならべられるものでない。人間という集合体はもつと複雑である。ひとりひとりがちがうのである。能力の多様性、多方向性という点からみるならば、人間ひとりひとは平等などであるのではない。少なくとも平面の上にならんでいといった単純なものではない。むしろ多様をみとめるから基本的人権は平等だと考えるべきである。質ないし方向のちがった人間——質というのは上下の質ではない——がいずれも能力は同じく尊重さるべき存在なのである。その意味で平等なのである。

そういうひとりひとりが特色をもつという人間の多様さを尊重して、教育を行なうことがひとりひとりを育てるといふことなのであ

て、現代の教育はその点からも十八世紀的一色の教育をしかもっていない。ひとりの教師が一斉に教授をして一斉にみんなおなじように分列行進をさせる教育である。そういう教育を土台にして、成績評定が行なわれている。学習点検とか教育評価とかといっても、行きつく所はここにある。このような成績評定が教育の中の仕事として行なわれていることがおかしいといえればおかしい。

5

生徒の側からいえば、さきにも述べたように、己が何ができ何ができないかが具体的に点検され自己評価ができるように教育がなっていないかとはならない。いかなる方法であろうと、具体的にそれが自覚されるのが最も大切である。採点というようなことは競争馬の順位をきめるために行なわれるものではないのである。それはどれだけの時間にどれだけができるかということであらわしたものとしてみ意味があるのである。

そういう意味の学習点検を行なうということになれば、それは教育がもつと緻密にプログラム化されて、かつ自学自習化されなくてはならない。そこで自ら学びつつ、自ら評価することが可能になる。その基本的体制の上に、教師がこれを助力するということになるであろう。教師の助力もひとりひとりに対する助力であって、ならば順位をつけるなどという助力ではない。ひとりひとりをよく知り、その方向をつかみ、忠告をするという点で、教師は多くの生徒の比較研究も必要であろう。があくまでそれはひとりひとりの特色をつかむものである。生徒をならば品評会をするのではない。ひとりひとりを惜しみ育てることが教師の仕事である。大勢をならべて評論するのではないのである。

6

教師がひとりひとりを惜しみ育てるためには、教師の教育活動はたえず自己批判と検討の対象とならなくてはならぬ筈である。これまで生徒の側の問題として学習点検を考えてきたが、それは結局生徒の自覚的点検・評価の過程を成立させるためには、教師は何をなすべきかということになる。教師の活動は大きく変わらなければならぬことはこれまで述べた通りである。こういう批判自体が実は教師の教育活動の評価なのである。教育評価とはまさにそのことなのである。教師が誤ったことをして生徒を誤らしめているのだという自覚がない所にかに教育評価をいおうと意味がない。これまでの教育評価論が観念のお題目に終わったのはそこに原因があるのである。これまで述べたことは、われわれ自らの反省である。われわれが極めてルーズないいかげんな考え方で学習点検とか評価とかを考えていたのではないか。生徒に自己批判と反省を促すのはよい。そのために資料を提供してやるのはよい。しかしそれが本当に生徒を育てるための自覚的行動を促すためのものかどうかは厳密に考え直してみる必要があるのである。そう考えてこれまで述べたような自己反省が行なわれねばならなかったのである。テストをやつて成績をつけて、通信簿を渡してやるなどということが、教師の大事な仕事だという常識を打破しなくては、真の学習点検とか、教育評価とかという活動が教師の側に興らないとみるべきであろう。これには大きな勇気と決断が必要だと思われる。

7

教育をするというのはいうまでもなく、生徒の能力を育てることである。能力というと、もって生まれた能力などという考え方をするが、

それは今の場合考える必要はない。もって生まれた能力があるのかないのか、どういうものかはよくわからないのである。とかくわれわれは教育の効果があがらなないと、もって生まれた能力が低いなどと逃口上をはくが、それは意味のないことである。今現に何ができなくて、どうできるようにするか、それを考えるのが能力を育てるということである。

ここでもう一つことわっておくことは、できるということばをよく使うが、これは能力ということを考える場合にとくに大切だと思う。私は日本の教育の中からわかるということばを追放すべきだと思っている。「わかったか、おぼえておけ」などというわけのわからないことばがよく教師によって使われるが、そういう考え方は、能力をつまみ人間を育てることにならないと思う。わかるなどというのは、わかったような気がするというだけであって、本当にわかるというのは、そう考えることができるということである。生徒を育てるという考え方からすれば、生徒がそう考えることができるようにすることなのである。それが育てるということであって「わかったか」というような文脈で教育をするから、生徒を忘れて教育する者の側の勝手な押しつけが行なわれるのである。

8

今何が具体的にできて、何が具体的にできないかをひとりひとりについて、見てやること、そのことがつまり学習の点検である。そしてそのできないことをできるようにまでしなければならぬ。あることが先生のように考えることができないう道すじをたどらせて、頭を訓練しなくてはならぬ。そう考えるという道すじをたどらせて、頭を訓練しなくては教育にならないのである。しかしそう考えさせるといつても、

命令したからそう考えることができるのではない。ある考え方の道すじをたどることができるには、そこに論理をたどる力が必要であり、考える材料についてもそれだけのものをもっていなくてはならない。生徒の側で、自分の考え方としてたどれるためには、それだけのレディネスが必要なのである。教師はそういう点をみて、その生徒に必要なことをやらせることが生徒の能力を育てるゆえんとなるのである。教師は、このようにひとりひとりを見て、生徒にそれぞれ必要なことをやらせるようにしているか、その必要なことは果たして本当に必要なことなのか、適切なことをやらせていることなのか、これは教師はたえず、自己批判し検討していなくてはならぬことである。これが教育の評価ということである。

学習の点検と評価とはこのようにして密接不離のものである。分ければ分けられるが、分けて考える必要はないともいえる。教師の立場からすれば、教師はまず生徒を知ることであり、そして、自己の次の活動を生み出す。そして、それが生徒によって行なわれているのを見て、また評価し、次の活動を生み出す。生徒はその間に自己評価をやっていることは前に述べた通りである。こうして生徒と教師の合作によって、教育は進んでいく。生徒の能力が開発されていくのである。教育する者が見なくてはならぬことは生徒が何がどこまでできて、どこからはできないかということであり、どうしてそれができないかということである。いかなる必然関係においてできないかということ、明らかにされれば、できるようにすることができるのである。この生徒はこれではできない、能力が低いからだなどという考え方はナンセンスである。成績のわるい奴だなどという言い方は意味がない。そうではなくて、できるようにするという路線で、できない理由と原因を追究するのである。教師のやることは、ただ、点をつけるなどという

ことではないのである。

9

このような学習の点検・評価には教育のプログラムがよほど緻密にできていなくてはなるまい。つまり何をどのような順序でできるようにしていくかという、生徒のドーイングのプログラムが精細にできていなくてはなるまい。

現代の教育のようないいかげんな、説明してわからせようなどという教育ではとても学習の点検などという考え方が生まれてこないのである。この頃漸く反省期に入ろうとしている学カテストなども、学習を点検し、教育を評価しようという考え方にはつながることができないのである。それは教育の根本がはつきりしていないからである。

最近出てきた考え方に、事前テストを行ない、そこで、ある学習活動のためのレディネスのないものをふるいわけの必要があるという考え方があがるが、現代の学習指導はその辺のこともまだはつきり自覚していなかったのである。漸くそこへ目をつけてきたということである。そういう程度で学習指導をやっていたのでは、生徒の方ではわけのわからないことをやらされていることになる。そういうことをやっている、学カテストなどということをやっていたのでは、何をしているのかわからないではないか。

学習の点検・評価を正しいあり方におこうとすれば、われわれの教育についての姿勢を正さなければならぬのである。今の程度で、教育をやっている、一生懸命やっているという考え方の思上がりを痛烈に批判しなければならぬ。今の教育は余りにも泰平ムードではないか。それは墮落ムードにつながるのではないか。

(国立教育研究所)